

平成27年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成27年11月～平成28年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、対馬海峡周辺域では「やや低め～平年並み」、その他の海域では「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年・平年を下回る。
- (5) ウルメイワシは前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年を下回り、平年並み。

※「前年」は平成26年11月～平成27年3月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター西海区水産研究所

担当：虫明、岡

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

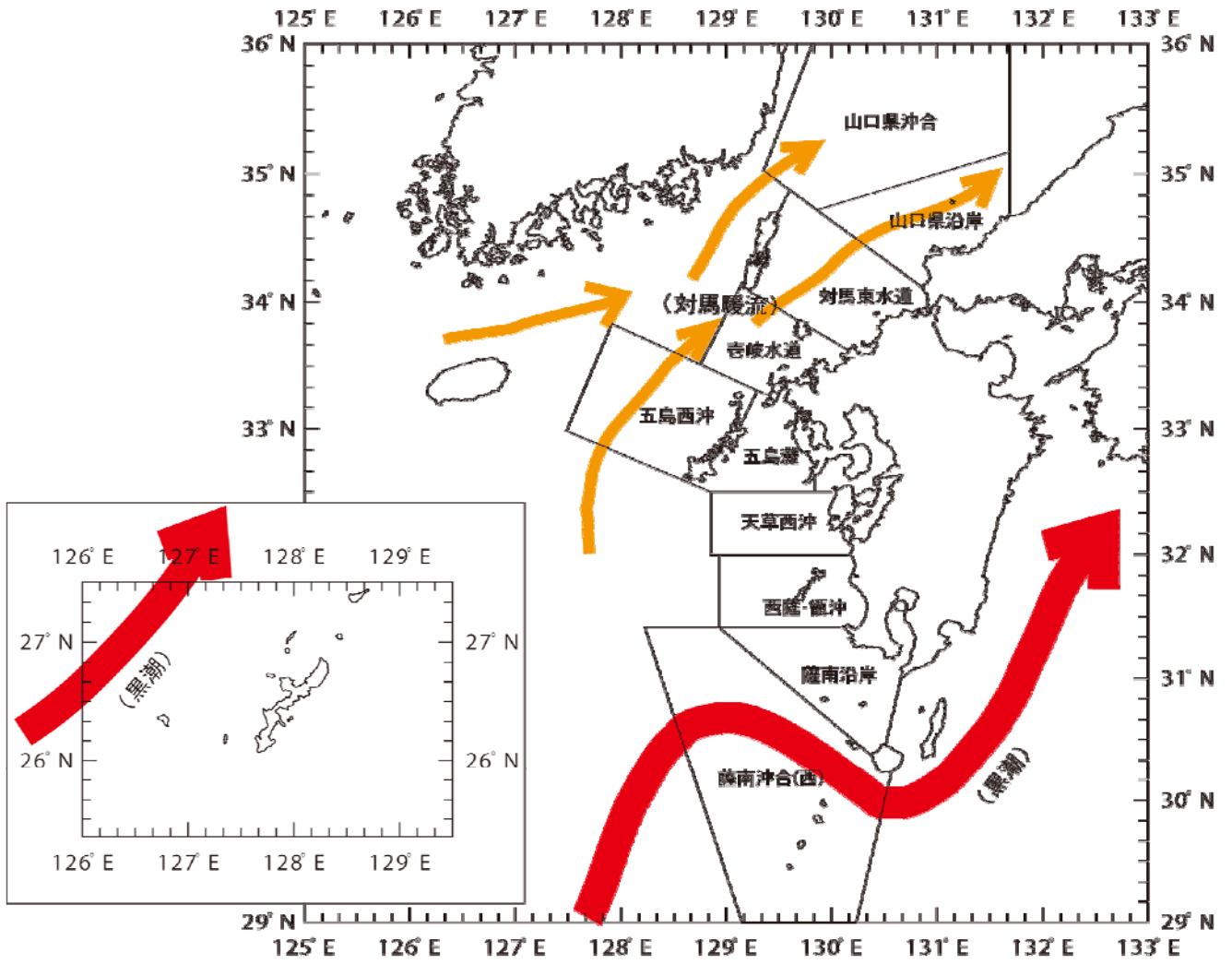
当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://www.fra.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2015年11月～2016年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘は「やや低め～平年並み」、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2015年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7月「かなり低め」、8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「平年並み」。

南部：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「やや高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4・5月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、6月は「離岸傾向」、7月は「接岸傾向」、8・9月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

(2) 海面水温

4・5月「平年並み」、6月「かなり高め」、7～9月「平年並み」、10月「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「かなり高め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、7・8月「平年並み」、9・10月「やや低め」。

山口県沿岸：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「かなり高め」、7～9月「平年並み」、10月「かなり低め」。

対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「やや低め」、8・9月「平年並み」、10月「やや低め」。

壱岐水道：4・6・8月「平年並み」。

五島西沖：4月「やや高め」、6月「かなり高め」、8月「平年並み」。

五島灘：4月「やや高め」、6・8月「平年並み」。

天草西沖：4～6・8・10月「平年並み」。

西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東：4・6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「平年並み」、10月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4・5月「やや低め」、6月「かなり低め」、7～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4・5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8～10月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや低め」、5月「はなはだ低め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8～10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「かなり高め」。

五島西沖：4・6・8月「平年並み」。

五島灘：4月「やや低め」、6・8月「平年並み」。

天草西沖 : 4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、8月「やや高め」、10月「平年並み」。
西薩・甑沖 : 4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。
薩南沿岸 : 4・5・8月「平年並み」。
薩南沖合 : 4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。
沖縄島南東 : 4月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、
10月「はなはだ高め」。

3. 現況 (2015年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2015年11月～2016年3月）

対象海域 : 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業 : まき網、定置網、その他

対象魚群 : 0歳魚（2015年級群（2015年生まれ））、1歳魚（2014年級群）、2歳魚（2013年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体 : 10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで平年を上回る。

(3) 魚体 : 25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体 : 25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～38cmの0～3歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 14～17cmの0歳魚（中羽銘柄）主体に、18～22cmの1歳魚以上（大羽銘柄）も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 15～20cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量 : 前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場 : 漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体 : 10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主体で、5cm程度の0歳魚（カエリ・小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2014年11月～2015年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2015年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999～2002年には30万～40万トンだったが、2003、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で経過している。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2006年以降はほぼ横ばいで、2014年は12万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の39万トンまで減少したが、2014年の資源量は57万トンに増加した。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2010年より減少傾向にあり、2013年に6万トンと過去最低の値となったが、2014年は9万トンに増加した。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は1992～2013年に比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年の資源量は2005年に高い値を示した後、緩やかな減少と増加を繰り返し、2014年の資源量は11万2千トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では、2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2014年の漁獲量は3万3千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にあり、近年では2010年に急増した。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は漁獲量が増加傾向にあり、2013年には8万6千トンであったが、2014年には9千トンに急減した。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以降は増加傾向にあったが、2014年は5万3千トンと推定され、前年9万9千トンより大きく減少した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は1976～1998年までは毎年2万トンを超えていたが、2000

年には1万3千トンまで減少した。2009年以降は増加に転じ、2013年には5万トンとなったが、2014年は大きく減少して2万5千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は1990年代に増加し、1998年には30万6千トンに達したが、2001年には13万トンまで減少した。2007年には24万7千トンとなったが、その後減少傾向にあり、2014年は12万2千トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は1996～2000年には10万トン超の漁獲があったが、2004年には6万1千トンまで減少した。2005～2008年まで再び増加したが、2009年以降は減少傾向を示している。2014年の漁獲量は前年4万8千トンよりやや増加し、6万1千トンであった。

2. 漁況の経過

2015年4月～8月の大中型まき網漁業の主な漁場は、対馬沖および東シナ海中部であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計4万4千トンで前年(2014年4月～8月、3万6千トン)を上回った。マアジは2万5千トンで前年(1万6千トン)を上回り、さば類は1万3千トンで前年(1万2千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における2015年4月～8月の沿岸漁業の漁況経過は、表1の通り。マアジの漁獲量は前年・平年を上回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは前年・平年を上回った。漁獲の主体は25～33cmの1歳魚と23cm以下の0歳魚であった。ゴマサバは前年・平年並みであった。漁獲の主体は32～38cmの2歳魚以上と27cm以下の0歳魚であった。マイワシは前年・平年を下回った。漁獲の主体は4・5月が15～22cmの1歳魚以上で、7・8月が7～17cmの0歳魚であった。6月はその両者が混ざった。ウルメイワシは前年・平年を下回った。漁獲の主体は4月～7月まで15～25cmの1・2歳魚であり、6月から3cm以上の0歳魚が混ざった。カタクチイワシは前年・平年並みであった。漁獲の主体は4月～5月が8～11cmの1歳魚で、6月～8月は3～12cmの0・1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2013年級群は2012年級群と同程度、2014年級群は2013年級群を上回る豊度と考えられる。2015年級群の評価は難しいが、2014年級群を下回る豊度と考えられる。これらから、0歳魚(2015年級群)は前年を下回り、1歳魚(2014年級群)は前年を上回り、2歳魚(2013年級群)は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当たり漁獲量)は、2012年から2013年にかけて低かったが、2014年には増加した(参考図参照)。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2010年以降増加した後、2012年は減少して、2013年以降は再び増加した。来遊量は前年並みであることから、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。2013年級群の豊度は2012年級群より低く、2014年級群の豊度は2013年級群より高いとみられる。2015年級群の評価は難しいが、2014年級群と同程度とみられる。来遊群の主体が0・1歳魚であることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで平年を上回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では1月～3月期には2歳魚以上(中銘柄以上)も漁獲される。2013年級群の豊度は2012年級群と同程度、2014年級群の豊度も2013年級群と同程度とみられる。2015年級群の評価は難しいが、最近の漁況から2014年級群と同程度とみられる。これらから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は低調だった前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚(中羽銘柄)が主体に、1歳魚以上(大羽銘柄)も漁獲される。2015年級群の評価は難しいが、これまでの漁況の経過より、2014年級群の豊度を下回ると考えられる。2014年級群の豊度は2013年級群を下回ると考えられる。以上より、全体の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。2015年級群の予測は難しいが、各県の4月～8月期の漁況および前年11月～3月期の漁況から、2015年級群の豊度は2014年級群を下回ると考えられる。2014年級群の豊度は2013年級群より低いと考えられる。全体として来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚秋季発生群(小羽銘柄)と、0歳魚春季発生群(大羽銘柄)および1歳魚(大羽銘柄)が漁獲の主体となる。これまでの漁況の経過より、春季発生群でみると2015年級群の豊度は2014年級群より低いと考えられる。秋季発生群の2015年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2014年級群より低いと考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年を下回り、平年並みと考えられる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2015年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網漁業の水揚量は、1522トンで前年・平年を上回った（前年比193%、平年比131%）。	中型まき網漁業の水揚量は、706トンで前年・平年を上回った（前年比1035%、平年比211%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は1505トンで前年・平年を上回った（前年比288%、平年比286%）。漁獲のうち98%をゼンゴおよびマメ銘柄が占めていた。棒受網では漁獲されなかった。小型定置網の漁獲量は10トンで前年・平年を上回った（前年比536%、平年比145%）。	代表港中型まき網漁獲量は424トンで、漁獲の少なかった前年を大幅に上回り、平年も上回った（前年比571%、平年比153%）。漁獲のほとんどをローソク銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は1トンで前年・平年を下回った（前年比22%、平年比14%）。
佐賀	前年・平年並みであった（前年比91%、平年比91%）。	前年を上回り、平年並みであった（前年比284%、平年比99%）。	
長崎	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比140%、平年比130%）。	地域により差があるが、前年を上回り、平年並みであった（前年比200%、平年比112%）。	
熊本 牛深港	水揚量は86トンで前年を下回り、平年並みであった（前年比40%、平年比95%）。	水揚量は342トンで前年・平年並みであった（前年比94%、平年比116%）。	
鹿児島	主要4港のまき網では、4・5月はアジ仔・豆アジ(2014年級群)主体の好漁がみられたが、6月以降はやや低調となった。期間中合計で693トンの水揚げで前年(723トン)・平年(659トン)並であった（前年比96%、平年比105%）。		主要4港のまき網では、4～7月はゴマサバ中小・中(2013・2012年級群)主体に、前年・平年を下回ったが、8月にゴマサバ豆(2015年級群)が好漁となった。期間中合計7481トンの水揚げで、前年(8104トン)・平年(7769トン)並みとなった（前年比92%、平年比96%）。

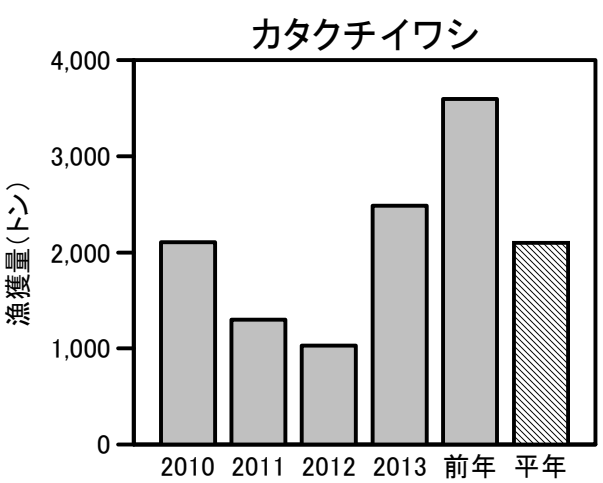
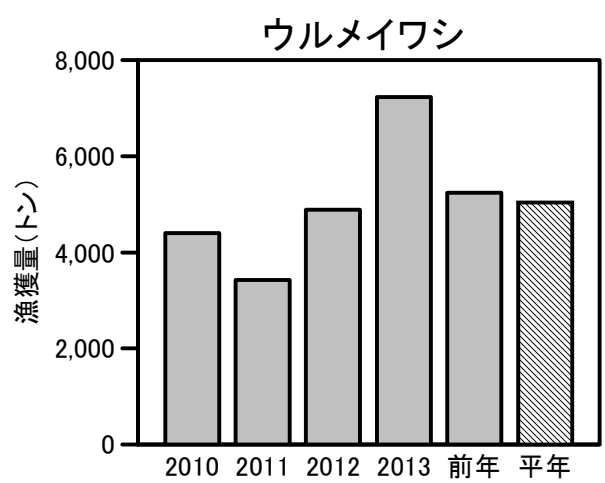
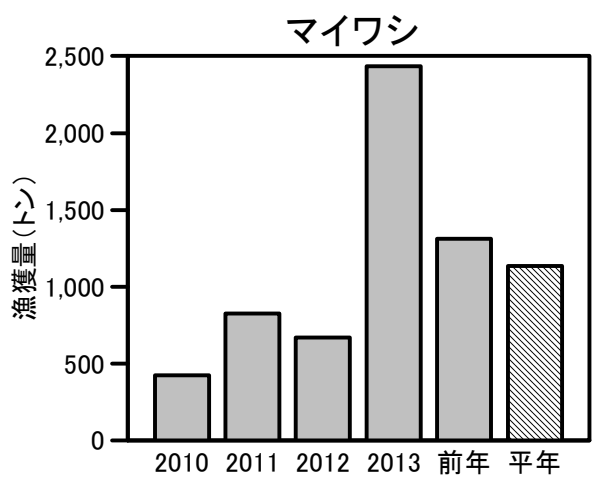
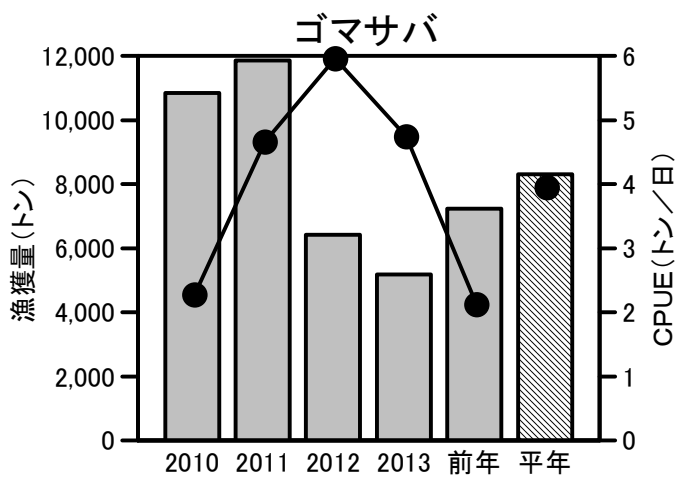
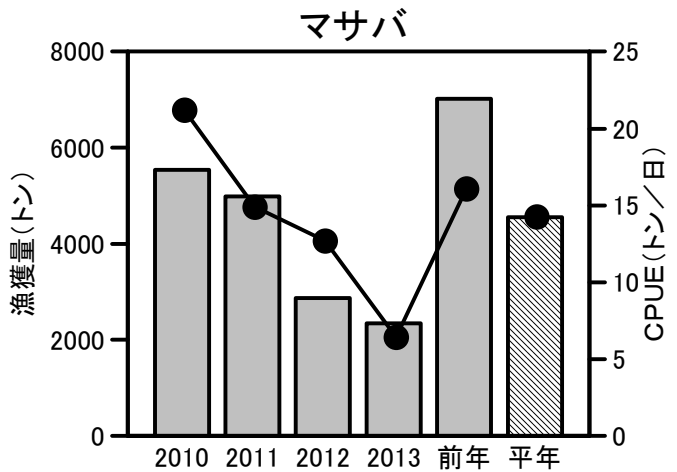
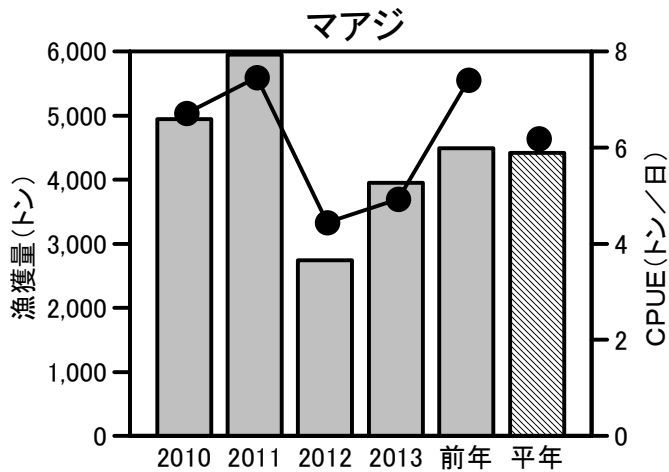
注：「前年」は2014年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされるさば類はすべてマサバ、鹿児島県に水揚げされるさば類はすべてゴマサバとみなした。

表1. 沿岸域の漁況経過（2015年4月～8月）

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網漁業の水揚量は、42トンで前年・平年を上回った（前年比3114%、平年比1410%）。 湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、8トンで前年・平年を上回った（前年比272%、平年比440%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、26トンで前年・平年を下回った（前年比26%、平年比38%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、小中羽主体に913トンで前年を上回り、平年並みであった（前年比204%、平年比113%）。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は179トンで前年・平年を上回った（前年比375%、平年比480%）。 棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は62トンで前年を下回り、平年並みであった（前年比58%、平年比83%）。 棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は17トンで前年を上回り、平年並みであった（前年比175%、平年比91%）。
佐賀	前年・平年を下回った（前年比2%、平年比3%）。	漁獲がなかった。	前年・平年を下回った（前年比8%、平年比4%）。
長崎	地域により差があるが、前年を上回り、平年を下回った（前年比205%、平年比14%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比46%、平年比58%）。	地域により差があるが、前年を下回り、平年並みであった（前年比66%、平年比84%）。
熊本 牛深港	水揚量は107トンで前年並みで、平年を下回った（前年比92%、平年比16%）。	水揚量は1469トンで前年・平年を上回った（前年比124%、平年比152%）。	水揚量は2449トンで前年並みで、平年を上回った（前年比98%、平年比123%）。
鹿児島	主要4港のまき網では、小羽（2015年級群）主体で、北薩海域の甑島周辺、薩南海域の野間池、内之浦沖でまとまって漁獲された。 期間合計で729トンの水揚げで、前年（2345トン）・平年（1671トン）を下回った（前年比31%、平年比44%）。 北薩海域の棒受網では、期間合計73トンの水揚げで、前年（114トン）・平年（243トン）を下回った（前年比64%、平年比30%）。	主要4港のまき網では、小羽（2015年級群）主体で、北薩海域の甑島周辺、薩南海域の開間沖、枕崎沖、内之浦沖でまとまって漁獲された。 期間中合計で829トンの水揚げで、前年（3365トン）・平年（2824トン）を下回った（前年比25%、平年比29%）。 北薩海域の棒受網では、期間中合計で554トンの水揚げで、前年（838トン）・平年（886トン）を下回った（前年比66%、平年比63%）。	主要4港のまき網では、4月は中羽主体（2014年級群）、5月以降は小・中羽（2015年級群）主体で、期間中合計で2084トンの水揚げで、前年（2265トン）並みで、平年（1599トン）を上回った（前年比92%、平年比130%）。 北薩海域の棒受網では、中羽主体（2013・2014年級群）に期間中合計で557トンの水揚げで、前年（467トン）・平年（548トン）並みであった（前年比119%、平年比102%）。

注：「前年」は2014年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。

沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他の魚種は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業の漁獲量。

漁獲量及びCPUEは11月～翌年3月までの値。前年は2014年、平年は過去5年（2010～2014年）の平均値。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋技術センター
福岡県水産海洋技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	(取りまとめ機関)
長崎県総合水産試験場	国立研究開発法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産技術開発センター	